



“町おこし”に立ち上がる若者たち

ふるさと回帰支援センターへの農村移住についての相談件数が、二〇一七年には三万件を超え、一〇年前の一・三倍に増えたことが報じられている。また総務省もはじめて過疎地への移住に特化した統計を公表し、一五二三区域の中で、人口に占める都市部からの移住者の割合が増えている地区は六三・一と四一・％に及び、移住者の半分以上は二〇、三〇代であることが明らかにされた▼田園回帰現象は大きな流れとなりつつあるが、これにとどまらず都市部においても同時併行現象として若者たちによる“町おこし”が本格化しつつあることを感じる▼その一つが東京の小金井公園周辺にある関野町の一画での動きである。この三月四日には「春の横丁まつり」が行われたが、この日は小さな路地をはさんで家を開放したり、軒先を利用したりしていろいろの店が並ぶ。「仕立てとお話し処Dono」では着物仕立ての実演と物語り。「福寿荘」では高知の柑橘による文旦むき教室、「新金菜屋」ではかぶと飯、「韓国民団」ではチジミ、等々と、そこに住む人たちが自分たちの得意技を生かして出店し、たくさんの人たちが足を運んで路地は大賑わい。小金井市の無形文化財である関野町餅つきも行われた。餅つき歌に合わせて、教人がそれぞれ杵を持つての集団餅つきである▼長屋風の家が軒を接して並ぶ一画の主な住人は若者たち。お金よりも日常性や地域コミュニティ、簡素な暮らしを重視するあらたなライフスタイルを実践つつ情報発信しようとしているように受けとめた。

(土着菌)